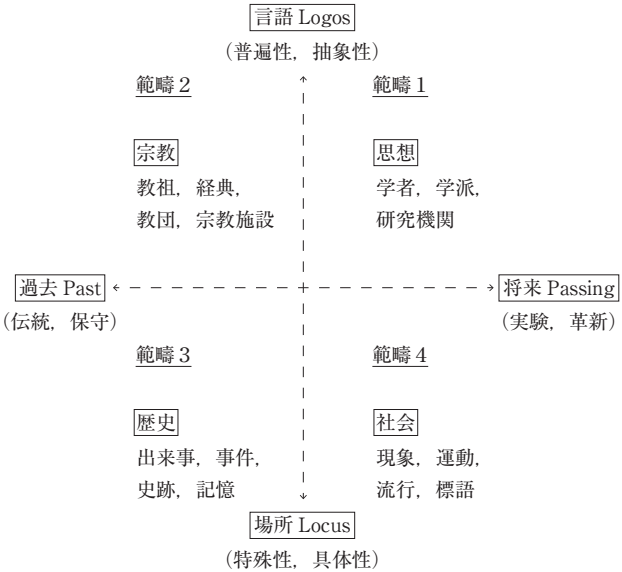
西南学院大学　国際文化論集　第36巻　第２号　187－190頁　2022年３月

アメリカ・太平洋文化コースの理念

宮　平　　望



１．時間軸と空間軸による分析

本論は，西南学院大学国際文化学部アメリカ・太平洋文化コースの理念に関する一試論（An Idea of American-Pacific Culture Course）であり，コース提供科目であるアメリカ思想文化論，アメリカ宗教文化論，アメリカ太平洋文化史，アメリカ社会文化論という四領域の特質の相関関係的理念を図示し，解説するものである。便宜上，左右に時間軸「過去 Past」と「将来 Passing」を，上下に空間軸「言語 Logos」と「場所 Locus」を置き，時間の進展と空間からの抽象度によって，第１象限から第４象限までを範疇１から範疇４とする。

２．四つの範疇

範疇１の「思想」は，この世の具体的な出来事や現象を概念化，抽象化して，一定の整合性のある考え方を過去，現在から将来を射程に入れて提示するものとして，言語と将来に向かう範疇に置かれている。これは便宜上の相対的位置にすぎず，あらゆる思想は何らかの点で，過去の思想，出来事，現象などに依拠している点で過去要因を内包し，古典も生まれる。また，種々の社会運動の契機にもなりうる。

これに対して，範疇２の「宗教」の多くは，過去の教祖やその言語的表現である経典に依拠する点で，言語と過去に向かう範疇に置かれているが，同様にして，新興宗教などは新しく生まれ続ける点で特殊な未来をも志向し，仏教の瞑想や無の境地は非言語化の過程でもある。聖霊を強調するキリスト教の教派や神学も，未来志向型である。

範疇３の「歴史」は，文献資料のない先史時代に始まり，過去の特定地域，特定時代の出来事を検討する点において，過去と場所から乖離不能であるが，国境や地域を越えたトランスナショナルな視点や歴史進展の類型論は一層普遍的な様相を呈し，過去の歴史研究こそ，未来への指針となる。

範疇４の「社会」は，特定地域における生活様式や運動形態において未来を開削する動因を有しつつ，標語や流行等を通して他地域にまで伝播して共有される契機を創出する。特に，ネット環境は新規な社会や共同体を構築し，特殊な世界を生み出しつつも，普遍的な関心に収斂する傾向も呈する。

３．相互関係

この座標があえて点線で区切られているのは，以上のような四範疇の相互関係を示唆するためであり，それは相互に程度の問題であり，強調点の置き方の相違にすぎず，優劣比較でもない。例えば，筆者は最近エアラインの研究に携わったが，それは20世紀の航空史であり，航空熱という社会運動と相俟って，

空つまり天への宗教的憧憬に棹差され，種々の科学思想に支えられて飛行技術が進展した。その前に研究テーマとしたディズニーランドも同様に，この世に天国を造りたいという世俗化された宗教的動機に始まり，公園の歴史的背景が参考にされ，おもてなしという文化は社会の流行にもなり，特に日本ではチップとは異なるおもてなしという応用度の高い思想的意義が注目されている（近業のものとして，拙著『ディズニーランド研究　世俗化された天国への巡礼』［新教出版社，2019］，拙著『ディズニー変形譚研究　世俗化された福音への信仰』［新教出版社，2020］，拙著『エアライン入門　逆風で飛翔する両翼』［大学教育出版，2021］参照）。

４．米国と米の国

「米国」アメリカを所謂「米の国」日本で研究する際に，中括りに理念化され過ぎた個人主義と集団主義，多民族社会と少民族社会または事実誤認に基づく単一民族社会，多様性と一様性という対蹠的図式が散見されても，例えば，英語圏のアメリカと英語教育重視の日本，ディズニーランドの本家アメリカとディズニー「ランド」，ディズニー「シー」，そしてディズニー「スカイ」の可能性も示唆されている日本のディズニーリゾート，さらに，米軍と日本の陸海空（＝「ランド」，「シー」，「スカイ」）の自衛隊との間に根続する親和性は，現実の駁雑な様相を垣間見せている。したがって，本論冒頭の座標は，「米国」と「米の国」が近似的表現であることを想起して，日米の近似的相互関係も視野に入れる必要がある。ここで，相対的に革命国家「米国」は「将来」と「言語」に，伝統国家「米の国」は「過去」と「場所」に執拗に牽引される傾向がある。

５．平和，人権，環境の理念へ向けて

こうした日米関係を象徴しているのが，日本の近代化の過程で，教育，福祉，医療等の分野を通して貢献したアメリカの先進的役割であり，特にキリスト教という宗教的背景がその特質すべき要因となってきた。現代に至るまでアメリカのキリスト教も，細分化された教派が象徴しているように，聖書の言葉そのものを過度に重視する根本主義（Fundamentalism）から，福音の社会改革的側面に照射した社会的福音（Social Gospel）に至るまで，また，過去の教義や教理そのものを展観する正統派から，三位一体論さえ否定するリベラル派まで，いみじくも上下左右の十字架形に分岐している。そうした中で，影響力のある現代アメリカ神学思想は，二十世紀までの戦争の時代を猛省しつつ平和の未来を志し，権力者の恣意よりは個人の人権や最近では動物の権利を復権させ，人間中心主義よりは生命中心主義の環境保護を唱導している（拙著『現代アメリカ神学思想　平和・人権・環境の理念　増補新版』［新教出版社，2018］参照）。

アメリカ・太平洋文化コース（American-Pacific Culture Course）の「太平洋（Pacific）」とは元々ラテン語で「平和（pax）」を「作る（facio）」という意味に遡及され，1522年に史上初の世界周航を船団に実現させたポルトガルの航海者マゼラン（Ferdinando Magellan, c1480-1521）が太平洋の穏やかさに因んで命名したものであることも（寺澤芳雄編『英語語源辞典』［研究社，1997］1020頁），このコースの針路を理念的に象徴していると言えるだろう。